

むさしの TALK

地元の人たちが「いいな」と感じている 「吉祥寺らしさ」を守りたい

宮藤官九郎さん
(脚本家・監督・俳優)

多くの人気作品を吉祥寺で生み出してきた、脚本家の宮藤官九郎さん。まちとの関わりや、まちの変化について語っていただきました。



宮藤官九郎(くどうかんくろう) 1970年宮城県出身。91年より「大人計画」に参加。脚本家・監督・俳優として活躍。現在はNHK大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック噺(ばなし)〜』で脚本を務める。また、パンクコントバンド「グループ魂」では、暴動名義でギターを担当している。

結婚を機に、奥さんの実家がある吉祥寺に住んでもう24年になりました。住み始めた頃は家で仕事をしていましたが、20代の頃は気持ちばかりが先走って思うように書けずイライラすることも多かったですね。そうすると奥さんにも当たってしまいうすうす、それが嫌で外に出て仕事をするようになりました。

当時よく通っていたのは、吉祥寺大通りにあった『デニーズ』です。『木更津キャッツアイ』や『マンハッタンラブストーリー』など、初期の作品はほとんどここで書いたんじゃないかな。集中して仕事をするには、少しいるさいくらいの場所が僕にはぴったりでした。なくなった時はかなりショックでしたが、今はもっぱらほかのファミレスで仕事をしています。

そんな大手チェーン店を利用して、いる自分が言うのもなんですが、最近では個性的な店がなくなって、吉祥寺らしさが減っているなと感じています。特に「バウスシアター」がなくな

● PRESENT

今回取材した、宮藤官九郎さんのサイン入り色紙を抽選で3名の方にプレゼント！詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。



なった時は寂しかったですね。映画に触れる窓口のような存在でした。昔はライブや芝居もやって、僕も役者として舞台に立つたことがあります。バウスは「吉祥寺でなければ見られない」ものをたくさん上演・上映していましたが、このような場所がなくなってチェーン店が増える、吉祥寺に住んだり、遊びに来る理由がなくなってしまうんじゃないでしょうか。まちが変化することは良い面もあるけれど、地元の人がいなと思うものはできるだけ残してほしい。これはもうまちのシンボルと化している横岡先生と僕とでパトロールして、個性ある吉祥寺を守らないといけないのかな(笑)。

